

宮本輝

miyamoto teru

愉樂の園

文藝春秋

著者紹介

一九四七年、兵庫県に生れる。追手門学院大学文学部卒業。一九七七年、「泥の河」で第十三回太宰治賞を、翌一九七八年、「螢川」で第七十八回芥川龍之介賞を受賞。さらに一九八七年、「優駿」で第二十一回吉川英治賞を受ける。著書に「螢川」「幻の光」「星々の悲しみ」「道頓堀川」「錦織」「青が散る」「流転の海」「春の夢」「避暑地の猫」「ドナウの旅人」「葡萄と郷愁」「優駿」「夢見通りの人々」「五千回の生死」「花の降る午後」、エッセイ集「二十歳の火影」「命の器」、旅行記「異国の窓から」、対談集「道行く人たちと」「メイン・テーマ」がある。

愉楽の園

一九八九年三月二十日 第一刷
一九九〇年一月二十日 第四刷

(定価はカバーに表示してあります)

著者	宮本 輝
発行者	豊田 健次
発行所	株式会社 文藝春秋
印刷所	凸刷印刷
製本所	大口製本

万一、落丁乱丁の場合は
お取替致します

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話代表(〇三)二六五一一二二一

目次

第一章	薄墨色の目	5
-----	-------	---

第二章	人間の鱗	54
-----	------	----

第三章	雨期の前	121
-----	------	-----

第四章	王宮広場	171
-----	------	-----

第五章	闘魚	220
-----	----	-----

第六章	水の道	284
-----	-----	-----

第七章	漂流物	336
-----	-----	-----

あとがき		373
------	--	-----

装丁 菊地信義

装画 有元利夫

「厳格なカノン」一九八〇年

愉^ゆ
楽^{らく}
の
園^{その}

第一章 薄墨色の目

一

木の低い寝台に寝そべったまま、すだれの下をかすかに持ちあげると、満開のブーゲンビリアの向こうで、細い運河が光りすぎてぼっとかすんだ。サム・ポーンの店の前に三人の若いごろつきが坐り、飢えた仔猫に石を投じている。

実際は、六本のブーゲンビリアの大本と運河とのあいだには、無数の鋭利なガラスの破片で忍び返しを成す高い塀があるのだが、それは庭からは勿論のこと、二階の客間や寝室や居間や、煉瓦を敷きつめたバルコニーから見えなかった。

「茶色い蜘蛛の巣……」

小声でひとりごち、恵子は、どう見ても斜めに崩れかけているとしか思えない木造りの太鼓橋を、頬杖をついて眺め入った。

タイに来て、このかつての貴族の旧邸に住みついたころ、恵子は、バンコクの市街地からほんの少しチャオプラヤ（メナム）河の近くに入ったあたりに張りめぐらされている運河を見て、そんな言葉

が浮かんだ。

おそらく、曲がるたびに河幅が変わる運河はチャオプラヤ河から来てチャオプラヤ河へ帰るのであるが、そう思つて一本の運河に沿つて歩くと、小乗の寺院の横を流れ、スラムの奥で犬とか猫とかの死骸を膨らませ、油膜とも溶けた汚物の腐汁ともつかない底なしの沼と化した。

またどこかで行き停まるのであらうと思える別の運河は、ひしめきあう高床式の家々の柱を洗い、青みどろのへばりつく河岸壁を濡らし、華僑の邸宅の周囲をめぐり、やがてブーゲンビリアの花や鶏の足や玉葱の皮を浮かべてメナムへと帰っている。その、どこでどうつながっているのか予測もつかない運河には、日本製の車のエンジンをつけた小舟が、もっと小さな櫓を漕ぐ舟を一瞬にして粉々にしかねないスクリューの回転で脅かしながら進んだ。この国において、人々が行き交う路地であった運河は、いまあちこちで埋め立てられ、「茶色い、破れ穴だらけの蜘蛛の巣」になっている。

恵子は、ジム・トンプソンの店で誂えたタイ・シルクの、くすんだ翡翠色のガウンの乱れを直さなのまま、再びうつぶせて顔をクッションに沈めた。恵子は、タイ人を好きになれなかったし、タイ料理も口に合わなかった。小乗の伽藍の色彩も模様も、大通りの喧噪と煤煙も、路地の悪臭も嫌いだ。けれども、タイ・シルクだけはひどく気に入って、ソファのクッションやベッドカバー、それに小物入れや壁掛けまでも、同じ色のタイ・シルクで揃えた。本当は、午睡用の小部屋の壁を、沈んだ色調のタイ・シルクで覆いたいのだが、あまりにも贅沢すぎて、気がとがめるのである。サンズーン・イナムサマーツにとつたら痛くも痒くもない出費だが、それは工場や商店で働くタイ人の三カ月分の給料よりもまだ多かった。

寝台の下で蚊取り線香は消えていた。階下の台所から、二人のメイドの話し声が途切れ途切れに伝わってきた。藤倉恵子は、タイに来て三年たつが、タイ語を覚えようという気はまったくなかったの

で、メイドが何を話しているのか皆目わからない。恵子にとっては、わからないほうがいいのだった。柔順で忠実を装う目の奥で、絶えず、

「ふん、この囲われ者が」

とつぶやいているのを、恵子は承知していた。二人のメイドが話していると、恵子はそれがすべて自分への侮蔑の言葉に思えた。しかし、一年もたたないうちに、もはやそんなことはどうでもよくなって、言葉のわからないことを、かえってありがたくさえ感じ始めた。彼女たちは自分の仕事をやっていればいい。私が求めることをたいした間違いない程度に遂行してくれればいい。そう割り切ったのであった。

口笛と、何か嘲るような笑い声が、サム・ポーンの店先でふいに湧き起こったので、恵子は壁に掛かっている時計に目をやり、きっかり三時であることを確かめると、

「ああ、またあの子をいじめてるんだわ」

とつぶやき、すだれ越しに視線を投じた。毎週、土曜日の三時に、その少年は太鼓橋を渡って、サム・ポーンの店の前を通るのである。脂気のない髪の手をきれいに刈りあげた、丸い目の、十四五歳の少年だった。いつもサム・ポーンの店先で、すきんだ目と野卑な所作を誇示して夕暮までたむろしている三人組に、少年はどこか余裕のある微笑でたちむかい、何か短い言葉を言い残して、路地へ消えていく。ときおり、光の加減で、少年の目は灰色になったりするのだが、その瞬間、彼は精巧なフランス人形みたいに見えるのである。肌は白かったが、決して中国系の顔ではなかった。

恵子よりも三つ歳下の二十三歳なのに、もう三人の子の母であるチェップが、氷の入ったナムチャ―と蚊取り線香を持って上がって来た。チェップは、サンズーン・イアムサマーツから、水道の水をそのまま氷にしてはならぬときつく命じられていた。必ず沸騰させ、それを冷まして氷を作るように。

お前たちと違って、タイの生水は必ず恵子を病気にするのだ。もし手抜きをして、恵子が下痢をしたり、体をこわしたりしたら、ただちに誠に^{まことに}するだけでなく、このバンコクのどこでも働けないようにする、と。それが、決して荒だった声も出さず、物静かな立居振る舞いを崩さないサンスーンの、メイドに下した唯一の威嚇であつた。

「ねえ、あの男の子、いつもどこへ行くのかしら」

恵子は、蚊取り線香の煙を目でぼんやり追いながら、チェップに訊いた。チェップは、十四歳のときから六年間、イギリス人の家でメイドをしていたので、英語が上手だった。それゆえ、サンスーンがいないときの、恵子の話し相手でもあつた。乳房はすでに垂れているのに、下半身の肉は盛りあがっているチェップは、寝台の横にひざまずいて、

「男の子……。どんな男の子ですか？」

と訊いた。

「あの橋を渡って、サム・ポーンの店の前を通るの。毎週、土曜日の、三時きっかりだわ。でも、帰って行くのを見たことはないの。あの三人が、いつもいじめるのよ」

「きつと、寺院に行くのです」

そう言つて微笑^{ほほえ}んだあと、

「たぶん、その男の子も、あの三人も、同じ寺院で育った孤児なんです」

とチェップは言つて、居間からベランダに出た。そして、タイ語で三人の若者に何か言つた。聞こえなかったらしく、チェップはもう一度、大きな声で繰り返した。三人のうちのひとりが、運河のほとりまで歩み寄つて、尖った顎を上下させながら答え返し、金持ちの邸宅を覗^{のぞ}き見ようとして身を屈め、首を突きだした。どんなに目を凝らしても、ぎらつく外部からは、すだれや、竹で作つたブライ

ンドを巧みに配し、柱も壁も床も黒光りするチーク材を使っている室内は見えないのだった。

「あいつは、どこでもいじめられてる。そう言ってますわ」

チェップは居間に帰って来て、再びひざまずき、ガウンのはだけた恵子の、ほとんど股間の近くにまで及ぶ白い肌理細かな脚に視線を走らせた。

「でも、友だちなんだそうです」

「そう……」

サム・ポーンの店のトタン屋根はすでに錆びて、ところどころ穴があいていたが、それでもバンコクの太陽は、そこに錆色の鏡を置いたかのような錯覚を与える。空気が汚れているせいなのだが、そのトタン屋根からかなり離れたところに建つ寺院の尖塔の先端は、周りのすすけた光彩とは異質の金色を放って、雨期には鬱金で、乾期には白金で屹立していた。

「小さなお寺ですが、昔から、たくさんのお孤児を預かって育てて下さっているんです。僧侶にならず、チュラロンコン大学やタマサート大学を卒業して、出世した子供たちも何人かいます」

とチェップは言った。

「出世？」

「ええ。大きな会社に就職したり、役人になったり」

チェップは、大学を卒業した人間はみんな出世すると信じていて、これまでもときおり、自分の知り合いが大学へ入学すると、

「あの子が、こんなに出世するなんて」

と自慢気に恵子に言うことがあった。

「でも、どんなに出世しても、ご主人さまのようににはなれません」

そう言つて、チェップは階下に降りていった。チェップは、サンズーン・イアムサマーツを心から尊敬している様子だった。サンズーンがこの家に来ると、ひざまずいて合掌した。それはサンズーンが、王室の血を引く人間で、第十何番目かの王位継承権を持ち、内務省の高官でもあったからである。サンズーンは四十五歳で、二人の娘がいるが、五年前、妻を病気で亡くして以来ずっと独身のままだつた。恵子との出逢いがなければ、彼はとうに再婚していた筈なのである。

恵子にとってサンズーンは、彼女が知っているタイ人の中で、数少ない「努力する人間」であり、決して急がない人間であり、恵子への愛情に関しては、彼女自身、対応にとまどうほど無垢な人間であつた。そのサンズーンの無垢な愛情に、いつも恵子は怠惰な娼婦として応じ返した。恵子は、サンズーンを愛したくなかつたし、人間の無垢な愛情の行先を信じてはいなかつたのである。

寝室の電話が鳴つた。居間と、敷地内に別棟として建つ使用人用の住まいに、それぞれ番号の異なる電話があつた。寝室の電話の番号を知っているのは、恵子と使用人とサンズーンだけだつた。恵子は、飲みかけのナムチャーを手に寝台から起きあがり、ちょうどバルコニーの横にあたる寝室へ行つた。

「きょうは、どういう日か、憶えてるかい？」

サンズーンの、少し鼻にかかつた声が聞こえた。恵子が何も言わないうちに、

「あのホテルのスイートルームを予約した。私は七時か八時ごろに行く。先に行つて、待つてくれ。直接、支配人に声をかけたら、部屋に案内してくれることになる。」

とサンズーンは言つた。

「二月の十五日……」

恵子は電話口でつぶやき、

「いまから行って、プールで泳ぎたいわ」

そう言ってみた。自分の肌が日に灼けるのを、サンスーンが好んでいないことを恵子はよく知っていたのだった。

「プールで泳いじゃいけないんだったら行かない……」

その恵子の言葉で、サンスーンは軽く笑い声をあげた。

「じゃあ、ホテルのプールで逢おう。そのほうが安全だ。またロビーの大理石のテーブルを倒したら、こんどは弁償させられる。あの日からちようど三年たったね」

喋り方はいつものとおりの悠長だったが、声には昂りが感じられた。サンスーンには珍しく、喋り慣れたアメリカン英語の語尾もぎごちない。

「ホテルで泊まるの？」

と恵子は訊いた。

「いやかい？」

「いやじゃないけど……」

寢室の、運河に面した大窓にもすだれが掛けてあった。その左端からは、路地の奥がわずかに見え、天秤棒をかついだ男が歩いて来た。片方には網を載せた七輪のようなものを、もう片方には鶏の肉や臓物や、唐辛子や魚醬や酢などを入れた箱をぶらさげている。どこか人通りの多い場所で客を待つのであろう。恵子が、この界限で名前を知っているのは、サム・ポーンと、カイという天秤棒の男だけであった。

サンスーンが何か言いかけたとき、

「いま、カイが仕事に出て行くわ」

と恵子は言った。運河に、カイの瘦せた体と、肩に掛けた重そうな商売道具が映り、それは、鮮明なさかさまの映像となって太鼓橋を渡った。

サンズーンは、夜遅く帰って来るカイの、闇の中の輪郭しか知らない。

「一度、そのカイという男を見てみたい。私に嫉妬を起こさせる何かを持っているのに違いないね」
サンズーンは笑いながら言った。

「みすばらしい六十歳ぐらいの人よ。足首が紫色に腫れてて、仕事の道具のほうが、彼の体よりも重たいみたい。だけど、カイが仕事に出かけない日はないわ」

「恵子は、体を使って働いている人間が好きなんだろう？　しかし、ムエタイの選手は嫌いだ」

「人を傷つけることで、お金とか名誉とかを得てる人は嫌いな」

恵子と話をしていると楽しい。そう言ってサンズーンは電話を切ろうとしたので、恵子はさっき言いかけた疑問を口にした。

「人目につく場所で私と逢うのは極力避けてるのに、どうしてきょうはあのホテルに泊まるの？」

少し口ごもったあと、サンズーンは、

「思い出の場所が懐かしくなった。恵子はジンライム、私はドライマティーニ。誰もいないプールを眺めながら、二人で飲みたいんだ」

電話を切り、恵子はいったとき、昼三畳分は充分にあるベッドに腰を降ろしていたが、緩慢な動作で身づくろいをし、ハンドバッグに化粧道具を入れ、日本から持って来た水着を箆笥から出した。そして、メイドを呼ぶ鈴を鳴らした。恵子との電話を切ったあと、サンズーンは別棟にいるチェップの夫にすぐ電話したらしく、車のエンジン音が聞こえてきた。チェップは二階にあがって来、恵子の脱いだガウンをたたみながら、

「十五分ほどお待ち下さい。冷房をかけても車の中はすぐに冷えませんから」と言った。

「車の窓を閉めきつとくからだわ。ずっとあけといたら、すぐに冷えるのに」

恵子は何の悪気もなく言ったのだが、チェップの目が一瞬きつくなった。

「窓をあけておけば、車の中に入った蚊を殺すのに時間がかかります」

それからチェップは、目をそらし、多少肩に力を込めてこう言った。

「きょうも、門のところで近所の子供たちが遊んでいます、近寄って来ても、頭を撫でてはいけません」

口紅を塗る手を止め、恵子は鏡台の前に坐ったまま振り返ってチェップを見た。

「どうして？ とっても可愛いから、私、これまでに何回も頭を撫でたわ」

「子供たちは、まだ小さすぎて知らないのです」

「何を？」

「私たちの国では、頭は精霊の宿るところとされています。親は、自分の子をけがされたと思います」

恵子はびっくりして立ちあがり、

「どうして、いままで教えてくれなかったの？ 私、あなたの子供たちの頭も撫でたわ。そのとき、

どうして教えてくれなかったの？」

するとチェップは、褐色の顔を伏せ、黙念と恵子の足元に目を落とした。濡れたような目は、これからいかにようにも変化させるための、注意深い準備を整えている。卑屈や寛容や当惑や、それ以外の意味不明の感情を演じ分ける目が、到底自分のかなわない相手であることを恵子はいやというほど思

い知らされていた。そしてその目こそ、タイという国それ自体であるようにさえ思えるのである。

それにしても、サンスーンの突然の誘いといい、きょうのチェップの肩の力といい、なんとなく無関係ではなさそうだ。恵子はそんな気がして、出かけるのをためらったが、ひざまずいているチェップのそばから無言で離れ、階段を降り、中庭を通って玄関へ行った。

車に乗り込むと、もうひとりのメイドであるティムが鉄の門をあけた。ティムは四十歳で、おもに料理と洗濯を担当している。住み込みではなく、バスで四十分ほど南へ下った地区の小さなアパートに暮らしているが、恵子はティムが、相当な量の米とか肉とかを無断で持ち帰っていることをチェップから聞かされていた。

国立図書館の前を通り、チャクラポン通りを左折してマハチャイ通りの真ん中あたりまで行くのに三十分近くかかった。運転手と庭師と、雑用夫とを兼ねるコップは、英語が片言しか解せなかった。タイ語でチェップは「ひよこ」であり、コップは「蛙」という意味なのだが、それはニックネームで、いつ、誰がそのように呼び始めたのかは、二人とも知らないらしい。庭仕事をしているのに、妻よりも色が白いコップは、骨組が細く、この華奢な体になぜこんな力がひそんでいるのかと感嘆するほどである。それは、この国の男たちの特徴でもあるのだが、恵子のコップに対する驚きは、体つきに似て声が甲高く、しかも感情を苛立たしく表現する点にあった。努力せず、半分死んだように生きることで、タイ人のやり方であるという先入観を持ってしまっている恵子は、そんなコップが「蛙」であり、妻のチェップが「ひよこ」だと知ったとき、くすくす笑ったものであった。まるで反対だわ、と思つて……。

車の周りでは、タクシーやサムローが、その屋根の上一センチばかりの空気を熱気でゆらめかせている。サムローの運転手は、ガラス窓越しに、恵子を覗き込み、目が合っても外そうとしない。その

日本製の三輪自動車も日本製のタクシーもトラックも、ほとんどが廃車とおぼしき年代物なので、騒音と排気ガスで街中はむせかえり、露店の食べ物の匂いと混ざって、恵子の目と頭の芯とをたちまち痛くさせた。恵子は二、三年前と比べるとベンツだとかプジョーなどの欧州車が増えているような気がした。

コップは、信号待ちで少しづつしか進まない交差点で、何台かのサムローや、三人乗りどころか、子供も抱いて四人乗りしているオートバイを指差し、何か言った。きっと、

「こんなに車が多いと息も出来ないし、バンコクの空は二度と青くなりません」

と言っているに違いなかった。コップは、恵子が解せないのを承知でタイ語を使うのだが、車が停滞したとき、まず何を言うのかを、その彼の常套句を、恵子はチェップに教わっていたのである。

旧正月が済んで、一昨日あたりから華僑たちの商売が再開した。通りに並ぶ三階建てのビルの一階は、雑貨屋、タイヤ屋、荒物屋、家具屋、花屋、自動車部品屋などの店舗だった。ほとんどは華僑で、劉然哲とか陳香念とか蔣忠鵬とかの名前を、大きな看板に赤や青や金で塗っていた。金製品を売る店の壁は、幾束ものネックレスの光沢で濺み、店先では警官が坐って新聞を読んでいる。その店を警護することが警官の本来の任務ではなかったが、それらの店は、みな所轄の警察署長や警官にへ袖の下^{しほ}を使ってガードマンの代わりをさせているのである。

コップはチャイナタウンのあるチャロンクルン通りを行くのをやめ、マハチャイ通りを真っすぐ進み、ラマ一世の像がある交差点を左に曲がりながら、

「車、車、車。車だらけ」

と英語で言っただけだった。チャオプラヤ河畔の路地からは、後方に王宮とワット・ポーの屋根が見えた。恵子は体をねじり、建ち並ぶビルと軒の傾いた木造アパートとの隙間から、寺院の屋根を